

<授業実践4>「描写を工夫して小説を書こう」(文学国語 第2学年 2学期)

1 実践にいたる背景

学習指導要領の改訂に伴い、選択科目「文学国語」が設定される。本実践では、共通必修科目「言語文化」との違いに焦点を当て、「文学国語」における「書くこと」の指導の一例を示す。

「書くこと」の指導事項として、「言語文化」では「自分の体験や思い」に基づいて書くことを挙げているが、「文学国語」では「読み手の関心が得られるよう、文章の構成や展開を工夫すること」や「文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること」など、「読み手」を意識して創作することを挙げている。創作において表現を工夫することは、表現を読み味わう観点に結び付き、文学的な文章の理解を深めることにつながる。そこで今回は、「言語文化」の発展として、「読み手」を意識して「創造的」な文章を書く単元で授業を実践した。

2 指導目標

(1) 単元の目標(下線部: 関連する学習指導要領の指導事項)

・情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。([知識及び技能] (1)イ)

・文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。([思考力, 判断力, 表現力等] A書くこと (1)ウ)

(2) 言語活動

ア 言語活動

自由に発想したり評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動。(A書くこと (2)ア)

イ 言語活動のねらい

小説の創作において、主に情景・行動描写を工夫させる。他者の提案を受けた上で、最も効果的な表現を選択させることにより、一つの場面にもさまざまな表現の可能性がある、表現の工夫によって読み手を引き付ける独創的な文章となることを実感させたい。

(3) 教材

ア 教材(出典)

諏訪哲史「市民薄暮」(諏訪哲史『領土』2011 新潮社) ※『あいち文学散歩』所収

イ 教材観

「市民薄暮」は、青年である「わたし」の前に、母親が16歳の女生徒として現れ、「一宮七夕祭り」に誘い合う場面を描いている。本単元ではこの構造を用い、「わたし」が時空を超えて「ある人」と出会い、その意外な一面を知る物語を創作させる。

(4) 主体的・対話的で深い学びの工夫

登場人物「ある人」を個々に選定し取材することにより、生徒の創作意欲を高めたい。また、既習の小説を参考にしたり、グループカンファレンスで他者の語感・語彙に触れながら協働で表現を工夫したりすることによって、読み手を引き付ける独創的な文章を工夫させたい。これらの学習活動を通して、主に「読むこと」として学習してきた文学的な文章を「書くこと」の視点で捉え直させ、両者を関連付けた深い学びへと導きたい。

3 評価

(1) 単元の具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現（書く能力）	主体的に学習に取り組む態度
情景や心情を適切な語句や表現を用いて表し、その効果を考えることを通して、語感を磨き、語彙を豊かにしている。	書くことにおいて、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫している。	読み手を引き付ける独創的な文章になるよう粘り強く工夫し、読むことでの学びを生かして、小説を創作している。

(2) 評価方法

ア 知識・技能

創作小説最終稿において、情景や心情を表す語句や表現を、適切に語感を意識して用いているかを、「ワークシート4」の描写文を用いて評価する。

イ 思考・判断・表現（書く能力）

創作小説最終稿の「最も工夫した描写部分」において、表現意図をもって表現を工夫しているかを、「ワークシート4」の修正箇所と「ワークシート8」の表現意図の説明を用いて評価する。

	評価A	評価B	評価C
小説における描写の効果を考え表現意図をもって表現を工夫している。	小説における描写の効果を考え、表現意図をもって表現を工夫している。	小説における描写の効果を考え、表現している。	小説において描写文を用いて表現しようとしている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

単元の概要を理解して自己の目標を立て、目標や学習の仕方を調整し続けながら、粘り強く学習に取り組むことができたかを、「目標&振り返りシート」と各ワークシートの記述を用いて評価する。

	評価A	評価B	評価C
自己の目標や学習の仕方を調整し続けながら、粘り強く学習に取り組んでいる。	自己の目標や学習の仕方を調整し続けながら、粘り強く学習に取り組むことができている。	自己の目標や学習の仕方を調整し続けながら、学習に取り組むことができている。	自己の目標や学習の仕方を調整しようとしている。

4 単元の指導計画（配当6時間）

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 *努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第1次（1時間）	①単元目標を知り、個別目標を立てる。 ②「市民薄暮」を参考に「ある人」と時空を超えて出会い、その人の意外な一面を知る小説を書く。	①「知識及び技能」「書くこと」の個別目標を立てさせる。 ②全体を構想した上で小説を書かせる。 ・事前に「ある人」を選定し取材させておく。	◇主体的に学習に取り組む態度 ◆行動の観察、記述の確認（「目標&振り返りシート」） *個別目標の例文を示す。 *個別に助言し、構想を明確にさせる。

次／時間	学習活動	言語活動における指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法 ＊努力を要する状況と評価した生徒への支援の手だて
第2次（2時間）	①地の文の種類を確認し小説の地の文を分類する。 ②個別目標を見直す。 ③4人でグループカンファレンスを行い、描写を提案し合う。	①「羅生門」を用いて情景・行動描写の効果を確認させる。 ②地の文を分析し、自己の表現上の課題を発見させる。 ③特に心情を描きたい場面について、イメージマップを作成し、場面を具体化させる。	◇知識・技能、主体的に学習に取り組む態度 ◆行動の観察、記述の確認 （「目標&振り返りシート」・「ワークシート4」） ＊表現したい心情を「ワークシート3」で確認させる。
第3次（3時間）	①表現を修正して作品を完成させる。 ②工夫した描写部分の表現意図を記述する。 ③単元全体の振り返りをする。	①表現意図にふさわしい表現を選択させる。 ②最終稿の表現がふさわしいと考えた理由を記述させる。 ③本単元での到達点と今後の目標を記述させる。	◇知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度 ◆行動の観察、記述の確認 （「目標&振り返りシート」・「ワークシート4・8」）

5 学習活動の実際

「市民薄暮」を参考とし、創作小説の枠組みを示したことで、時空を超えた小説を構想させることができた。また、題材を取材させることにより、創作意欲を高めることができた。

創作小説の課題を地の文に限定し、「説明」「行動描写」「人物描写」「情景描写」「心理描写」に分類することによって、自己の表現上の課題を確認させることができた。その後、グループカンファレンスで改善案について話し合い、表現を工夫させた（写真1）。このことにより、読み手の目線で自分の作品を見直し、表現を修正させることができた。



【写真1 グループカンファレンスの様子】

6 研究の成果と課題

生徒の小説の捉え方に変化が見られた。「自分で書いてみると、作者が、何をどんな気持ちを込めて書いているのか、分かったような気がする」という感想には、作者側の視点を獲得する契機となったことがうかがえる。また、取材した人物について「今まで考えたこともなかったことを考えた」という感想が多かった。取材に基づく創作が「心の機微を描き、日常の世界を見つめ直す」機会となり、「文学国語」の目指す「感性・情緒の側面の力」の育成につながったと考えられる。

一方で、情景描写の多くは天候に終始し、平易な表現が多く、描写を比喩と混同している生徒もいた。「語感を磨き、語彙を豊かに」する手だてとして、語彙集を提示したり、描写の工夫を段階別に示したりする必要がある。さらに、構成や展開、視点なども工夫して創作を重ねると、「独創的で文学的な文章を創作する」という「文学国語」の「書くこと」の目標を達成できるのではないかと考える。

【参考文献】ナンシー・アトウェル著『イン・ザ・ミドル ナンシー・アトウェルの教室』2018 三省堂

目標＆振り返りシート

組 番氏名

単元 目標	知識・技能	思考・判断・表現（書く能力）
ひとつの事柄を表現するのに、複数の候補を考え、最も効果的な表現を選ぶことができる。	その場面の気候や起こったこと、登場人物の行動などを濃くと書かずに工夫して書く。	「ある人」や「わたし」の心情を、心情語を用いずに、描写文によって伝えることができる。
各自の 目標	その場面の気候や起こったこと、登場人物の行動などを濃くと書かずに工夫して書く。	お母さんへの心情を語彙に伝わるように描写文を書く。
中間 振り返り	説明文と行動描写が多いかた。	心情をそのまま書いてしまっている文があった。
目標の 見直し	どんな場面のかげんな行動がどんな心情をうんだかが伝わるように	母の話を聞いたとき自分の心晴を植物の生き物、景色などで表す。
評価	◎ ○ △	◎ ○ △
できる ように なった こと	一番良い表現を見つけたため、小説などが見たことよりある言葉を選んで書いてみた。決山言葉の意味や正しい使い方を知れた。	登場人物の心情や行動を濃くと書いたりして、文を情景が行動描写で表せるようになった。
今後 身に つけた こと	少し難しい言葉を使ったり、小説をもうと読んで、色々な単語を知って、使っているように思った。	次書く機会があれば、最初から描写を考えて書いてみたいと思った。

描写を工夫して小説を書こう 2 組 番氏名

★「ある人」を選定し、取材・情報収集をしよう

質問例

- ・どんな人（例：高校生）でしたか。
- ・どんな夢を持っていましたか。夢を実現するために何をしていましたか。
- ・悩みやコンプレックスはありましたか。それをどのように克服しましたか。
- ・大きな決断をしたことがありますか。人生の転機となったことはありますか。

人物名	年齢	当時の年	歳頃	所属（学校等）	好き・得意なこと 夢中だったこと	嫌い・苦手なこと 避けていたこと	悩み コンプレックス	夢 あこがれ	決断したこと 転機	当時のエピソード

描写を工夫して小説を書こう 3 組 番氏名

★創作小説を構想しよう

「わたし」が「ある人」と時空を超えて出会う、

その人の意外な一面を知る。物語

（誰と お母さん） （いつ 中学校くらい）

（どこで 帰り道・家） （出会い、

その人の意外な一面（何を いじわるに した / 家庭の複雑）を知る物語

★細かな設定を考えよう

名	「ある人」人物	設定年齢	歳頃	所属（学校等）	場面（季節・時間） 場の雰囲気	★「ある人」が 思っていること 考えていること	そこから見える 「意外な一面」	★それを知った 「わたし」の心情
	母		13	中学校	秋 夜	自分から我慢したいといえない 自分より弱い。	辛い過去、強心	本当は強い 今の母への感謝

★グルーブ・カンファランスを行い、「行動描写」「情景描写」を工夫しよう

① 作品の地の文を「説明」「行動描写」「人物描写」「情景描写」「心理描写」に分類し、○の記号を文頭右側にメキする。

種類の文の地	
説明	この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいふ災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方はひととおりではない。
人物描写	英夫君は火鉢に手をかざした。右の指には針灸がいくつもできてゐる。
情景描写	・彼女と別れた後、ぼくはひとり歩き出した。 見上げると黒い雪がたちこめていた。 ・彼女と別れた後、ぼくはひとり歩き出した。 見上げると雨上がりの空に虹がかかっていた。
行動描写	〔NHK 高校講座 ベーシック国語〕 第38回小説の読解 下人は、やもりのように足音をぬすんで、やつと急なはしごを、いちばん上の段までほうようにして上りつめた。
心理描写	その髪の毛が一本ずつ抜けるのにしたがって、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。

〔羅生門〕
〔羅生門〕

② 心情を描きたい場面や人物の様子を作者に質問し、具体的にイメージする。

③ 挿入する「行動描写」、**「情景描写」**を提案する。

※文を尋えて、作者の「ワークシート4」下段に書くか。フセンで貼る。

※「説明」「会話文」「心理描写」は必要最低限とし、「情景描写」「行動描写」に置き換えたり、削除を提案したりする。

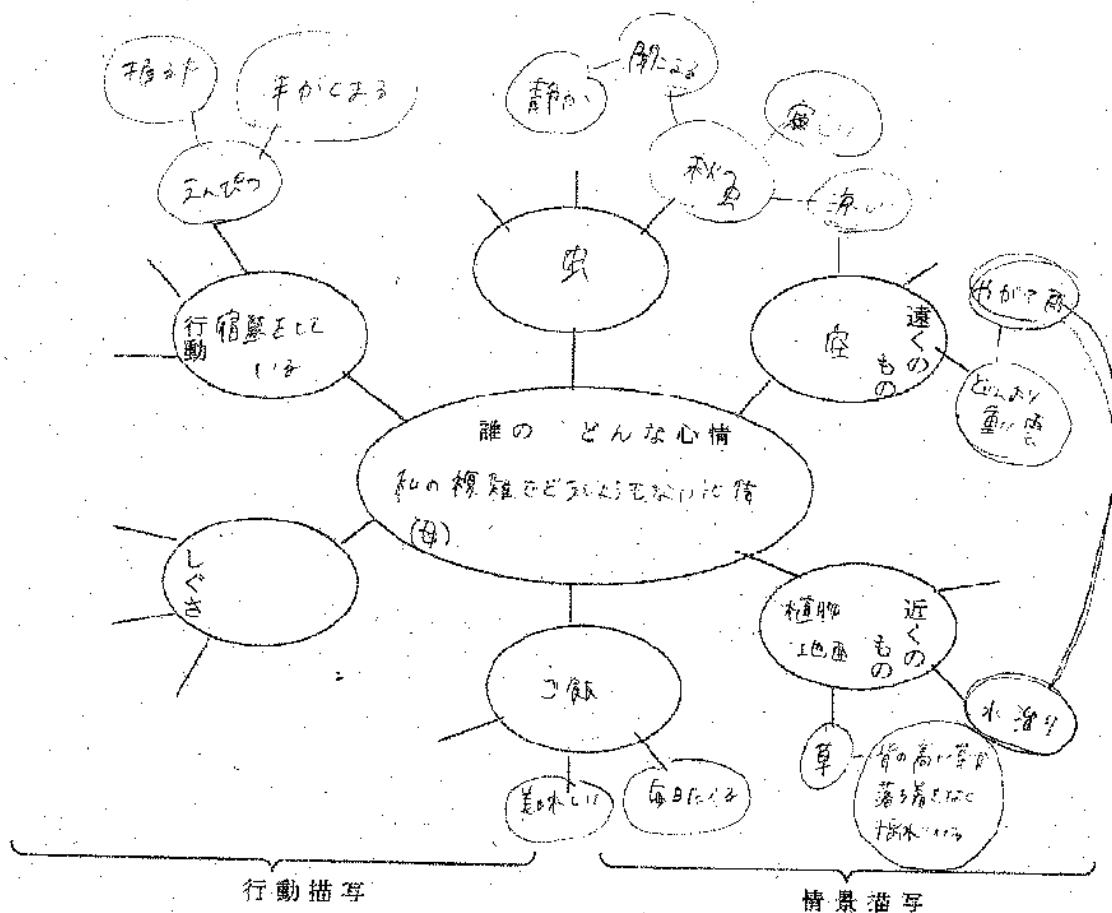
★ 宋 文 公 集

「行動描写」「情景描写」によって、場面と心理がつかかり、表現に興行きが出る。登場人物の心理を感じ取れるような描写文を考え、提案しよう。

〈個人向け〉

④ グループカンファランスでの提案をふまえて、作品に用いる表現を検討し、作品を完成させる。

※行間に書き込むか、記号や番号をつけて、順序が分かるように示せばよい。

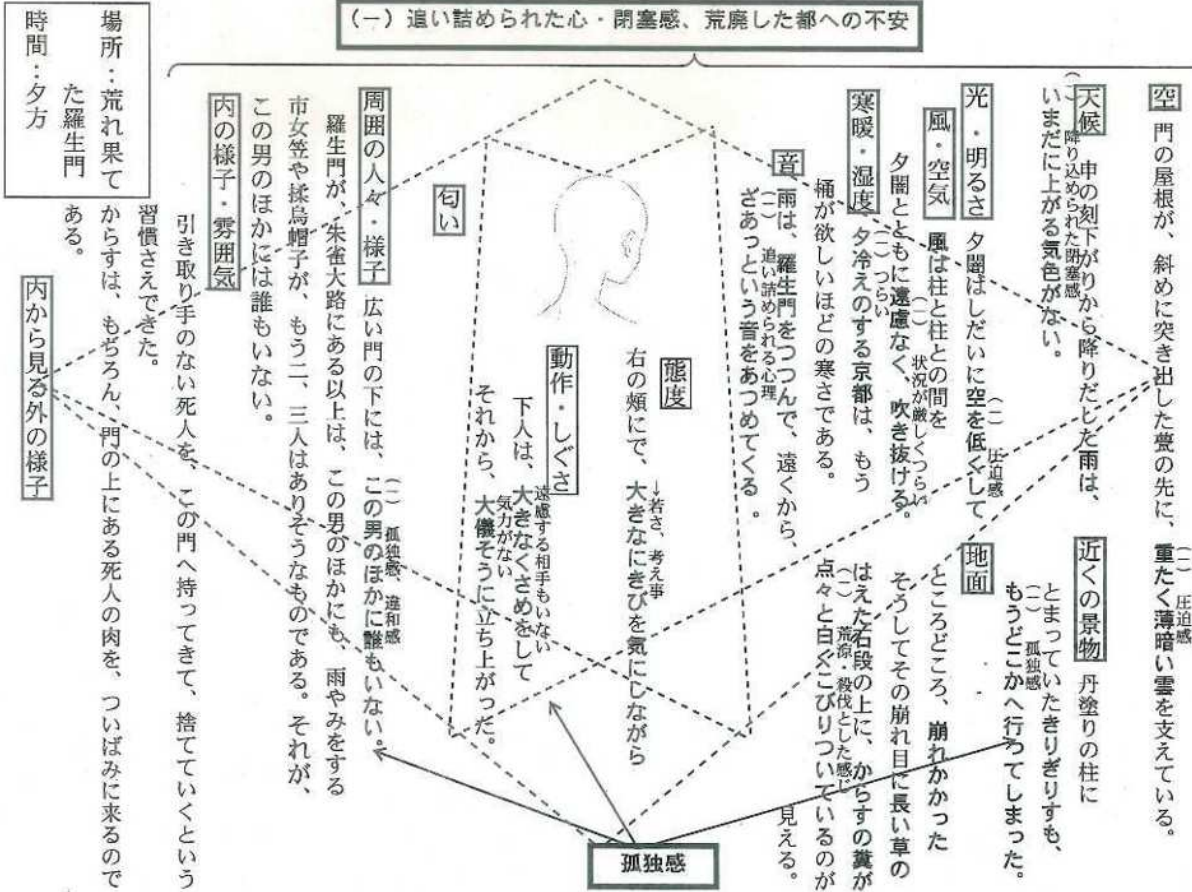


描写を工夫して小説を書こう(6)(改) 一組 番氏名
★登場人物の心情からイメージマップを作り、「情景描写」「行動描写」を添えてみよう

描写を工夫して小説を書こう7
★芥川龍之介「羅生門」の情景描写

組 番氏名
行動描写では、下人の心理が描かれていた！

(一) 追い詰められた心・閉塞感、荒廃した都への不安



描写を工夫して小説を書こう8 一組 番氏名
★「工夫した描写部分」の表現意図を説明しよう
原稿（ワークシート4）の「工夫した描写部分」を赤で大きく囲うこと。

赤らくなった顔の調を覚えるのは、
諦めたような声だった。

としていた
部分を

少し顔を空けてから、先程よりも強く握った鉛筆で
彼には宿題を再開して言った。考えないうちに、自分に
言い聞かせようという口調で。

に改めた。

その理由

最終稿の表現がふさわしいと考えた理由を説明しよう。
(グループカンファランスの意見・提案についても説明すること。)

母の行状を「諦めたような声だった」だけを表したので、行動描
写を大々という意見があった。鉛筆を強く握るという行
動描写は、何かに我慢している母の心情が伝わると思った。
今までの敬語だった母が「休む暇はないから、はなないわ」とタメやうに
なったことも、自分に言い聞かせるような口調で」と補記すること
で、より自分を追い込むような母の性格が伝わると思ったため、
最終的にこの表現にした。